

「新しい公共」と鳩山さんが言い出した時、ボクは小躍りした。だから、時々国会にも行ったりして、情報収集に勤めた…なんてロビーストみたい(笑)。でも、雲をつかむようで、今のところ言語明瞭、意味不明。やっぱり育ちが邪魔して、社会的課題も「友愛」に化けちゃうのかなあ、とはある国会議員の評。

ここはチャンスかもと、刑余者支援のシンポジウムを議員会館でやった。そこで、三宅雪子さんという衆議院議員が真っ先に挙手してくれて、弟が知的障がい者であると切り出し、この問題に強い関心があると語った。ボクは、テレビにも出てくるこの女性の謙虚さにすっかり魅せられた。また、友人の中川治衆議院議員らが「自立就労議員連盟」を旗揚げして、ボクは結成総会で報告をした。そしたら、あの「仕分け人」の菊田真希子という衆議院議員に、勘所をつかんだ良い話だったと誉められた。障がい団体のこともよく勉強されていて、彼女こそ勘所をよく押さえていると、これまた魅せられてしまった。

鳩山さんは宇宙人だし、小沢さんは怖いし、陽のあたるポジションにいる人もいれば、縁の下の人もある、考え方も右から左まで混在している、与党というのは大変だなあと思いつつも、確かに、「これまで」を突き抜けようという志向は感じた。言語明瞭、意味不明と茶化さずに、つきあっていこうと思った。



鳩山さん、5月末決着でも良いじゃないですか

普天間問題の「5月末決着」も、確かに言語明瞭、意味不明の類だ。マスコミって、ボクみたいには寛容ではないらしく、これを迷走と決めつけ、支持率という「一種の煽り」で、「論点」不明の政局にしている、とボクは、鳩山さんに同情する。そもそも、米海兵隊が沖縄に居続ける理由はあるのか？ずっと「抑止力」って説明されてきたけど、何に対する抑止？北朝鮮、中国、それともテロ？まったく実感がわからない。こんな説明で、沖縄にこれ以上負担を強いることはできないし、徳之島も受け入れるはずがない。橋下さんは、軍事戦略に精通しているらしく、関西空港で受け入れても良いと言ったけど、さすがに大阪府民もこれは無視。かと言って、50年ずっと「怖い」存在だった米国の

の機嫌も損ないたくない。ホントは、多少時間はかかってもいいけど、米国が引き取るのが筋では…と言いたいのだが、社民党は空気も読まず、グアム案出して、ワヤにってしまった。

ボクは、鳩山さんにエールを送りたい。あなたの「これまで」を突き抜けようという志向はよくわかったから、「5月末(すえ)決着」を「5月末(み)決着」に読み替えて、「怖い米国」とも対等に話し合うことができる世論をつくろうと、国民に問いかけたら良いじゃないですか。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの
この逸話

十三人の刺客

十三人の刺客

時代劇 28 DVD



監督：工藤栄一
脚本：池上金男
音楽：伊福部昭
キャスト：片岡千恵蔵
里見浩太郎
内田良平
丘さとみ
月形龍之介
嵐寛寿郎
西村 晃
製作：1963年東映作品
モノクロ 125min
DVD版：特アゴスティーニ
ジャパン

弘化元年（1844）初頭に起きた明石藩家老の自害から映画は始まる。この頃蘭学者弾圧や、沿岸には異国船が出没しはじめ竜馬や歳三たちも控えに入る時代背景のはずだ。しかし、この映画にはそんな世情など微塵も出てこない。ひたすら幕藩体制を支える武士の一分（いちぶん）を賭けた凄絶な暗闘だけがテーマとなっている。

高校生の頃、黒澤明監督の「七人の侍」（54年）を見て、それまで東映時代劇の殺陣に慣れ親しんだ脳天をぶち壊された。「十三人の刺客」は、黒澤に触発され新しい東映時代劇を目指して製作されたことは明らかだが、決定的な違いは黒澤のヒューマニティーに対し、工藤監督のそれは、武士階級の絶対的序列が通底音として見事に表現されていたことだ。

片岡千恵蔵、月形龍之介、里見浩太郎ら出演者の多くは、かつて東映時代劇の看板を背負う俳優たちであったが、この映画ではまるでスター性を無視した群集劇として斬新で、何度見てもこの新鮮さが失われな

い逸編であると実感できる。

明石藩主松平某は十二代将軍の実弟だが、性癖非道な所業で幕府政道を危うくしていた。江戸老中職たちが藩主暗殺の断を決定し、公儀目付け役島田新左衛門（片岡）にその任が下り、内密裏に刺客たちが集まり始める。しかし、この計画は明石藩側用人鬼頭半兵衛（内田良平）の推測が当たり、以降島田と半兵衛の息詰る確執を生じていく。元々二人は昌平校（幕府直轄の学問所）の同窓で、救い難いバカ殿を持つ半兵衛だが、主君に殉じることこそが武士の一分だ。しかし、秀才島田に対し、身分卑しい半兵衛の劣等意識が闘争の推進力を養っていく。

参勤交代を期し計画は決行される。朝靄深く立ち込める街道筋から最初は蹄（ひづめ）の音だけが、そして騎馬のシルエットがゆっくり立ちあらわれてくる。迎え撃つ13人の侍たち。この場面はモノクロームゆえの明暗が美しく、闘いへの緊張が高まる。その後の殺戮シーンは凄惨で、「七人の侍」をもしのぐ時代劇の絶品だと僕は思う。映画の4分の1が戦闘シーンに費やされ、チャンバラの醍醐味は抜群だ。出立時、里見に芸者扮する丘さとみが「いつ帰ってくださる」と寂しく問う。里見が答える。「早ければ1月足らず、遅ければ次のお盆に帰ってくる。迎え火をたいて待っていてくれ」。この場面は時代劇に残る秀逸なそして哀しい恋情シーンだ。そして最後、島田は「殿を切らねば俺の一分が立たぬ。お主もおれをやらねば一分がたたんだらう」。そう言って半兵衛にわざと切られるが、全編武士道非情の映画にあってこのシーンは一服感を味わえたのだった。

hidarimaki

お詫び

4月号「鉄道員」の製作紹介記事で、校正ミスがありました。カラー作品とあるのはモノクロ作品の誤りです。お詫びし訂正いたします。

